第100回記念ベルギー研究会 発表要旨

山内瑛生「博士論文『現代フランス文学とベルギー・フランス語圏文学に見るカフェの表象』とアラン・ベレンボームの最新作Le Coucou de Malinesについて」

本発表では、発表者が11月に東京大学に提出した博士論文『現代フランス文学とベルギー・フランス語圏文学に見るカフェの表象』で扱った議論の概要を説明する。発表者は、本論文において、フランスとベルギーの文学史およびカフェ文化史の差異を踏まえたうえで、1960年代以降の両国の文学に登場するカフェという場が、「オートフィクション」をはじめとした現代の自伝的作品の中で、作家による「自己」の探究に不可欠な背景となっていることを明らかにした。

また、発表の後半では、博士論文で対象とした作家の一人であるアラン・ベレンボームの最新作Le Coucou de Malinesの紹介も行う。1957年のブリュッセルとメヘレンを主たる舞台とするこの作品は、戦争の爪痕がなお残る戦後ベルギーの姿を探偵小説という手法を通じて浮き彫りにした良作だ。本作の主要なテーマについて解説を加えつつ、最後に発表者自身の今後の研究の展望を示すこととしたい。

岡本夢子「キャロリーヌ・ラマルシュの小説について―性愛とエクリチュール」

キャロリーヌ・ラマルシュは1955年リエージュ生まれの作家である。1996年にLe Jour du chienでベルギーの小説や短編集に授与される最も権威ある文学賞であるヴィクトール・ロッセル賞を受賞、2019年にNous sommes à la lisièreでゴンクール短編小説賞を受賞した。2014年にはベルギー王立フランス語文学アカデミーのメンバーにジャン＝フィリップ・トゥーサンと同時に選ばれている。1991年から2024年の33年間で37作品(réédition 含む)を発表し、現在も活動を続ける多産な作家である。2023年のTextyles はラマルシュを特集していることからも、すでにその作品は文学研究の対象となっていることがわかる。

ラマルシュの作品の特徴を一言で形容することは難しい。というのもラマルシュは詩から小説、児童文学やBDまで、あらゆるジャンルに挑戦しているからである。本発表では初期作品に見られる性愛をテーマにした小説作品を主に扱い、ラマルシュ作品群の、さらに同じテーマの他作品の系譜の中での位置付けを試みる。

内田智秀「誰が手を加えたのか ？――ウィーダの知らない（？）『フランダースの犬』」

ウィーダの『フランダースの犬』は日本では広く周知された作品であるが、同作品の実証的な研究は十分にされていない。本発表は初出である月刊誌『リッピンコット・マガジン』（1872年1月号）と、初版である『フランダースの犬とそのほかの物語』（ロンドン：チャンプマン・アンド・ホール社、1872年）の紹介と、それらの異同を比較検討することである。一般に改稿は作者自身が手がけたものとみなしてしまう。しかし、初版本文には物語を無視するような章立てなど不可解な異同が観察される。これらを踏まえ、チャンプマン・アンド・ホール社版の本文がウィーダ自身ではなく、第三者の手によって加筆修正された可能性について述べる。この機会にさまざまなご指摘をいただけると幸いである。

西川太郎「国際貿易交渉における欧州委員会の内外戦略：1980年代から1990年代初頭の欧州共同体（EC）の対日貿易交渉に注目して」

本発表の目的は、1980年代から1990年代初頭にかけての欧州共同体（EC、現在の欧州連合（EU））と日本との輸出自主規制（VER）の交渉における、欧州委員会の内外戦略を分析することである。輸入国による貿易制限とは異なり、VERは輸出国が自主的に輸出を調整する貿易措置であり、1980年代から1990年代初頭にかけて輸入国の国内産業保護のために広く導入された。にもかかわらず、EUの貿易政策の研究のほとんどが公式の貿易協定の交渉を分析しており、非公式の貿易取り決めであるVER交渉についてほとんど注目してこ

なかった。この実証的な研究のギャップを埋めるために、ECのVER交渉の典型例として、本発表では、①10品目に関するECレベルの日本のVER（1983年）、②日EC自動車合意（1991年）の交渉を分析する。特に、2つの事例について、欧州委員会の①EC加盟国に対する対内的なフレーミング戦略、②日本に対する対外的な「手を縛られた（tied-hands）」戦略について考察する。データとしては、EUおよび日本の公文書館（アーカイブ）で近年公開された交渉記録を分析する。

後藤加奈子「幕末明治期の開港場横浜における外国人社会とベルギー人（２）ある領事の物語」

横浜開港の翌年、1860年。外国人居留地の建設が始まる。居留地には英米を筆頭とする欧米諸国出身の人々が住み、商業・居住・教育・信仰・裁判・娯楽などの活動が展開されていく。1866年に日本と修好通商航海条約を結んだベルギーは、他国よりも10年ほど遅れて各港の外国人居留地にその存在を示し始めるが、その数の少なさにもかかわらず、ベルギー人は当時の外国人社会の娯楽を象徴する風刺画雑誌「ジャパン・パンチ」にたびたび登場する。本発表では、1880年から1884年までの期間に「ジャパン・パンチ」で10回ほど取り上げられた人物（キャプションによれば「在横浜ベルギー総領事」）、ギュスターヴ・スクリーブの人物像に注目し、横浜駐在ベルギー領事として任命されたのち、総領事へと昇格し、バタヴィアに「異動」になるまでのスクリーブの軌跡をたどる。同時に、1899年の条約改正までの期間、居留地内で起きた事件を裁く際に適用された領事裁判権の行使の実態についての考察を試みる。

山口博史「ベルギーから学ぶ――ユーラシア境界変動地域の比較社会学に向けて」

ベルギー社会に関する研究に取り組んでいるとしばしば呈される疑問に「何の意味があるのか？」（より辛辣な場合には「何の役に立つのか？」）というものがある。ベルギーに多少なりとも関心を持ってくれる向きにこれをどう説明すればよいだろうか。ひとつの方向性は、ベルギー社会を深く研究したうえで、その特徴を詳しく説明できるようになることだろう。こうした研究の意義は大変大きなものがあり、報告者もこれに取り組むよう試みてきた。近年、もう一つの方向性の可能性を報告者は探っている。それらベルギーに深くコミットする研究で見出しえた社会構造と「類似の」構造を世界の各地に見いだしていこうという試みである。国・地域が異なればまったく同一のことは生じないものの、「類似の」社会構造を有する世界の各地に生きる人々の姿をとらえる比較社会学的な試みのさい、ベルギーで学んだことをどのように活かせるだろうか。試みに議論してみたい。

柳川優「ベルギーにおける内容言語統合型学習（CLIL）実践から探る日本の英語教育への応用」

本研究の目的は、欧州におけるCLIL（内容言語統合型学習）の実践事例を通じて、日本の英語教育に新たな示唆を得ることである。具体的には，英語を外国語として学ぶベルギーの高等学校を対象に，CLILの実践経験が豊富な英語教員が「内容と言語の統合」や「4つのC（内容、コミュニケーション、思考、協学）」をどのように取り入れているか，また意味（meaning）と形式（forms）の習得が同時に進むようなインプットをどのように提供しているかを調査するものである。CLILは欧州の言語教育政策として発展しており、内容と言語の同時学習を目指すFocus on Form の指導法に関連している。また、CLILの理念は日本の新学習指導要領における「資質・能力の3本柱」と共通する要素があると考えられる。現在の日本でもCLILの実践が広まりつつあるが、内容と言語の統合方法について共通理解が十分に得られていない現状がある。本研究は、欧州の事例を参考に、内容と言語の相乗効果を高める具体的な授業活動や教材のあり方について示唆を与え、日本のCLIL実践に貢献することを目指している。

吹田映子「ベルギー王立美術館の館長交代について」

　ベルギー王立美術館の館長を2005年以来18年間務めたミシェル・ドラゲが昨年2023年4月末に三度目の任期満了をもって退任した。今年2024年7月にキム・オーステルリンクが新たな館長に就任したものの、その間一年を超えて館長が不在だった。代理は王立図書館の館長が務めて運営に支障はなかったようだが、決してスムーズとは言い難いこの度の館長交代の背景には何があったのか。ベルギーの国政とも密接に絡んだその経緯を報告する。

岩本和子「ベルギー研究会の歩み ―「ベルギー学」構築へ―」

　2007年に発足したベルギー研究会が、今回で100回目となりました。ベルギーをフィールドとした学際的研究の意味や意義を考えながら、活動の足跡を振り返り、みなさんと共有したいと思います。また、研究会での繋がりをもとにした派生的な活動である「ベルギー学」シンポジウム、ベルギー研究の論文集、ベルギー文学翻訳会なども紹介します。今後の活動についても一緒に考えていきましょう。